

# 医療法人宏潤会 大同病院

## 常に最新の医療環境を追求しつづける 大同病院を訪ねて

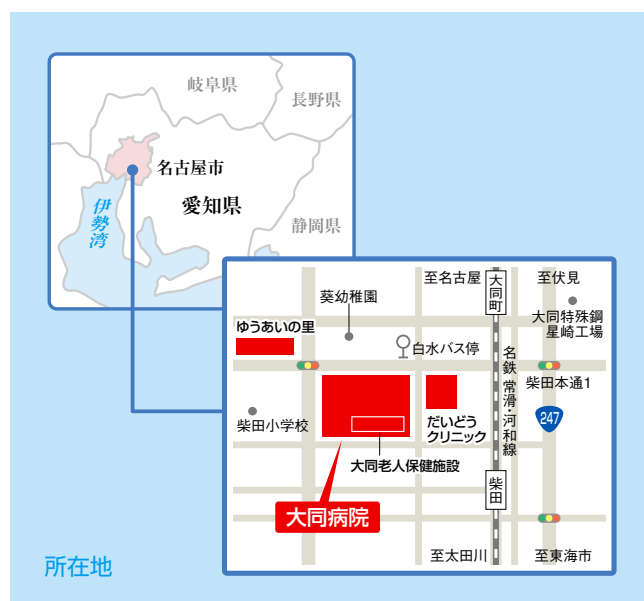
編集委員 小田 和幸



大同病院 外観

医療法人宏潤会大同病院は、名古屋市南区の名古屋港に程近いところにあります。名古屋港は、総取り扱い貨物量は7年連続で日本一、外国貿易貨物量は9年連続で日本一という国内屈指の貿易港です。取り扱い品は、輸出では自動車関連が71%、輸入では液化天然ガスや鉄鉱石などの天然資源が58%を占めています。

このように、日本を支える自動車関連産業の輸出入基地を抱えた名古屋市南部地域の拠点病院である大同病院は、その長い歴史の中で常に最新の医療環境を構築しています。その一つとして、2010年1月、オフセットオープン式多目的イメージングシステムCUREVISTA®を導入し、内視鏡検査と泌尿器検査を中心とした多目的検査に使用しています。吉川理事長、小谷院長、印牧副院長、および神谷技師長にお話を聞きました。



所在地

○はじめに吉川理事長にお聞きしました。

### ●大同病院について

小田：ここは、名古屋港のすぐ近くに位置していますね。

吉川理事長：そうですね。この先に少し行けば港があります。そのため、昔は港湾労働者の方がたくさん受診されていましたが、今では機械化が進み、かなり減ってきたようです。

小田：本院は、昭和14年に大同特殊製鋼株式会社の病院部門として開設し、70年以上の長い歴史を持っていらっしゃいますね。

吉川理事長：はい。その中でいろいろなことを経験してきました。特に、昭和20年には戦争の空襲で被災し、昭和34年の伊勢湾台風では甚大な被害を受けました。伊勢湾台風ではこの地域一帯が浸水し、1ヶ月間、病院を閉鎖せざるを得なくなっていました。

小田：度々の不幸に見舞われましたが、その後は以前にも増して医療環境を充実されています。

沿革を拝見すると、その時代が要求する最先端の設備や体制をいち早く導入されていますが、そのお考えはいかがでしょう。

吉川理事長：病院機能評価や診断群分類別包括評価(DPC)

など、医療を取り巻く環境は常に変化しています。当院は、救急急性期に特化した病院として、外来患者用の大同クリニックと急性期患者用の大同病院とに分けて診療を行っています。

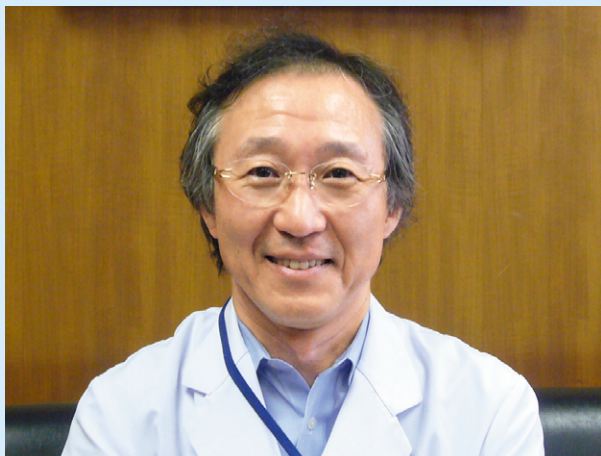
小田：そうすると、われわれ患者側にとっては待ち時間が少なくなり、充実した診療を受けることができるようになるのでとても助かります。しかし、医療を提供する側にとっては各種機器や設備・スタッフを二重に準備するなど、さまざまな面で厳しい状況になるのではないのでしょうか。

吉川理事長：たしかにそうかもしれませんが、私としては二重にそろえるということではなく、必要なものを必要に応じて準備する、というように考えています。今、ようやく出発点に立った想いです。とはいえ、いいものをできるだけ安く購入したい気持ちはあります。

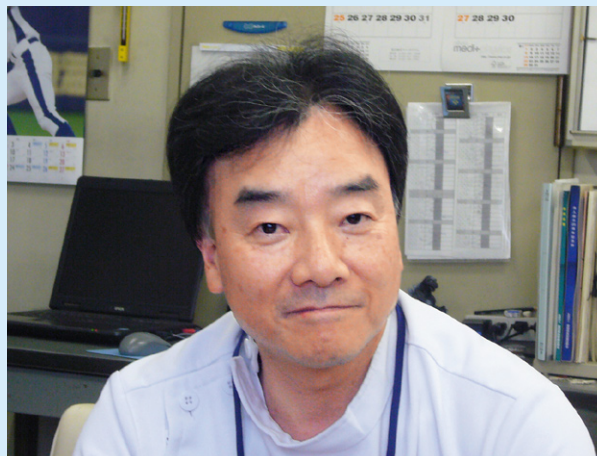
### ●患者の視点に立った取り組み

小田：ホームページを拝見すると、「みんなにやさしい病院」をコンセプトに掲げ、患者満足度調査結果など最新の情報公開もされていて内容が非常に充実していますね。

吉川理事長：外来患者数や救急患者数、手術件数など、直近の3ヶ月間のデータを更新・掲載しています。患者様にとって必要と思われる情報はできるだけ公開するようにしています。



吉川公章 理事長



小谷勝祥 院長



患者図書館「いきいきの森」



CUREVISTAの設置状況



小田：「患者図書室」と掲載されていますが、病院の中にある図書室とは珍しいですね。

吉川理事長：これは、「いきいきの森」という名前の図書室で、聖路加国際病院の日野原先生が主宰されるNPO法人に応募して資金をいただき、開設しました。私たちが急性期病院として実施している高度医療の内容を患者様ご自身に理解していただかなければなりません。この患者様と私たち医療提供者との協働作業の手助けのために必要と考え、設立しました。

小田：われわれ患者側が最新の医療に関する本を個人的に探すことはたいへんですし、そのような本は高価であることが多く、たいへん助かると思います。

### ○次に、神谷技師長にお聞きしました。

#### ●CUREVISTA導入の背景

小田：今回、CUREVISTAを導入していただきましたが、その背景についてお聞かせください。

神谷技師長：消化器検査装置と泌尿器検査装置の更新に伴い、1台の装置で両検査ができることを前提とし、機種選定を進めました。特に、最近ではこれらの検査で使用されるIVR用の各種デバイスが進化し、高齢者や手術の困難な患者様につ

いても治療を行えるようになり、医療ルネッサンス(変革)とも言うべき状況となりました。このような状況に最もよくフィットする装置としてCUREVISTAを選択しました。

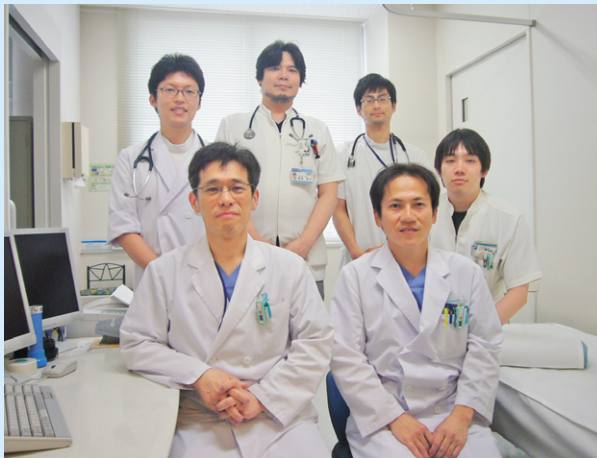
小田：具体的にはCUREVISTAのどのような点を評価していただけたのでしょうか。

神谷技師長：まず、テーブル周囲にワークスペースを広く取れることです。次に、テーブルを動かすことなく関心領域の移動が可能なことですね。この機能を知ったとき「検査をより安全に行うためには、これしかない！」と思いました。

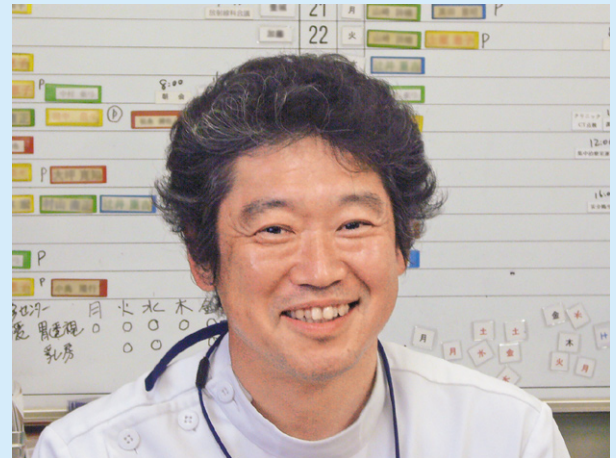
小田：神谷技師長は、これらの特長をさらに活かすためにベース部分を埋め込むことをご提案されましたね。

神谷技師長：はい。私は、CUREVISTA導入に際し、この検査室を“スタジオにしよう”と考えました。つまり、ある目的のためにステークホルダー(利害関係者)が集まって作業をする部屋と位置づけました。そこで、できるだけ作業しやすいように、ベースの埋め込みと作業スペース内のフロアケーブルレス化を実現しました。この結果、テーブル奥側にスタッフが自然に立ち、点滴台を普通に転がすことができ、CUREVISTAの創り出すワークスペースをさらに効果的なものにしました。いわば、“better”な検査環境を“best”な状態にしました。

小田：フロアのケーブルレス化について、どのような点に配



印牧直人 副院長(前列左)と消化器科の皆さん



放射線科 科長 神谷 悟 技師長



CUREVISTA上での臨床風景



透視モニターと内視鏡モニター



慮されましたか。

神谷技師長：各種の4面モニタを天井走行式としたため、フロアには内視鏡装置や超音波装置の電源ケーブルが残ります。そこでコンセントのミラーリング化により対応しました。すなわち、検査室の左右対称位置にコンセントを準備することにより、内視鏡装置や超音波装置などの配置が変わってもこれらの電源コードが作業スペースに入らないようにしました。

小田：この方法であれば、内視鏡装置などの機器を天井から吊るすことなくフロアのケーブルレス化を実現でき、コストの節約になりますね。

#### ○最後に、小谷院長と印牧副院長にお聞きしました。

#### ●実際にご使用いただいて

小田：実際にCUREVISTAをお使いいただき、医師のお立場からいかがですか。

小谷院長：内視鏡装置を用いたIVRという手技から見て、CUREVISTAはちょうど、アンギオ装置とX線テレビ装置の中間に位置する装置だと考えています。医学と工学のコラボレーションによりできた装置であり、その良さは、まさに臨床医が実感できる装置だと思います。外傷に対する緊急処置など手術と同じような環境でも使ってみたいです。

印牧副院長：ワークスペースが広く、テーブルを固定したままで視野を移動できるため、検査が非常にしやすくなりました。また、テーブルサイドボタンで操作できることは、視野の位置を微調整することができて、特にERCP(内視鏡的膵管胆道造影検査)にとっても便利です。

大同病院は、その長い歴史の中で2度の不運に見舞われましたが、それを乗り越え、以前にも増して発展してきました。医療環境が目まぐるしく変わる中、大同病院のコンセプトである『みんなにやさしい病院』を目指して、常に最新の体制・環境でサービスを提供し続けています。『医療は患者様と医療提供者との協働作業』という言葉がホームページのあちらこちらに見られますが、一方通行になりがちな診療行為を、常に患者の立場に立って、患者といっしょになって取り組んでいます。

今回、お話しをお聞かせいただいた吉川理事長、小谷院長、印牧副院長、神谷技師長の医療に対するお気持ちがそのまま病院の体制や設備に反映されていることを強く感じました。

長時間にわたってお話しをお聞かせくださり、ありがとうございました。

※ CUREVISTAは株式会社日立メディコの登録商標です。



藤田圭治 部長(前列左)と泌尿器科の皆さん



神谷 悟 科長(左端)と放射線科の皆さん



内科待合室



検診センター



筆者(前列右)、  
XRシステム本部 原部長(前列左)、  
名古屋支店 村本課長(後列左)、  
XR営業本部 田代主任(後列右)